



「浮世絵 猫百景」展覧会が面白かったのと、サントリーホールのご案内広告に載ったウイーンにある浮世絵がカラフルで美しかったのとで、吾輩は改めて江戸の文化を見直した。そこで渋谷の「たばこと塩の博物館」で開催されている「江戸の判じ絵」を観に行ってきた。因みに1,300点以上あったそうだ。全部解明するのはかなりの時間を要するので大変だが「展示する方はもっと大変だった」とは主任学芸員：岩崎均史氏の言。吾輩が行った9月16日午後には岩崎氏の講演があった。大勢の人が来ていたが、この展示の第1回目は何と13年前！ニヤ、ニヤと吾輩は13年前に来ていたりピーターと会話してしまった、人間語で。ちょっとマニアックな分野であるかもしれないが、興味のある方はどうぞ。

~~~~~

**2012年9月15日（土）～11月4日（日）「江戸の判じ絵」**

たばこと塩の博物館 TEL：03-3476-2041（常設：昔の煙草と世界の塩も見られるよ）

JR「渋谷」駅下車ハチ公口から徒歩10分 公園通り～東武ホテル向い

10：00～18：00（入館は17：30まで）月曜日休館。但し9/17,10/8は開館。9/18,10/9は休館

一般¥100 小・中・高生¥50 \*14:00からの講演会（1時間半ほど）当日整理券配布

9/29（土）「おもちゃ絵と江戸のなぞなぞ」（湯浅淑子 学芸員）

10/7（日）「ことば遊びの系譜 中世～近世」（小野恭靖 学芸員）

10/27（土）「物尽くし判じ絵」（岩崎均史 主任学芸員）

■判じ絵とは

いわゆる絵文字。絵を言葉に置き換えて読む。でも現代の携帯メールの絵文字とは少し違うようだ。現代の絵文字はその一文字に意味を含むけれど、江戸時代の絵文字表現はもう少し複雑だったようだ。



左は岩崎均史氏お気に入りの「茶釜の判じ絵」（ピラから引用）

このように ガマガエルがお茶を点ている絵だと「茶釜」

猿の絵に濁点を付けて「ざる」

釜を刀で切っている絵は「かまきり」

象の絵に金太郎の上半身だけ書いてあれば「ぞうきん」

歯の絵と上下逆転した猫が書いてあれば「はこね」



桜の真ん中が抜けていれば「さら」

■江戸時代の庶民の娯楽は歌舞伎だったが、歌舞伎役者の名前を判じ絵にしたものもあった。

現代でも歌舞伎役者の浴衣などには屋号が判じ絵で染められているが、絵文字だけでなく漢字や仮名も織り交ぜて使われている。判じ絵人気が高まって、絵だけで満足できず漢字や仮名も使われてどんどん難しいクイズになった。また染物屋は注文がなくても必ず定期的に判じ絵を使った染物を作ったそうだ。

■魚屋、小間物屋などの商家は自分の店の商品を判じ絵にして広告を作った。判じ絵が複雑になるほど人気が出た。そこで人気の判じ絵のある店では、商品を買わずに無料の広告の判じ絵だけ欲しいという希望が殺到したため「それでは困る」と店の包装紙を判じ絵にして、商品を買わせたそうだ。

地図の地名も判じ絵なら恋文（ラブレター）も判じ絵。解読できなければ道に迷ったり、「わからん」と振られたりしなかったのかニヤア。内容より解読すること自体を楽しんだのだろう。（2012.9.17記）